

兵庫県家島町男鹿島大山神社遺跡のナイフ形石器

小林 博 昭

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日 受理)

はじめに

男鹿島は、旧石器研究史上、兵庫県下で初めてナイフ形石器が発見された島であり、大山神社遺跡の名称は、1959年の総合学術調査にて、全国的にその存在が知られることになった。1989年以降、4年間に亘る調査が遂行されており、調査期間中に旧石器が出土している。また採集された旧石器は、剥片、チップ類まで含めるとかなりの点数になっている。本稿ではそれら資料のうち、これまでの調査時に一括して取り上げられたナイフ形石器を扱う。

遺跡の概要

大山神社遺跡は、兵庫県飾磨郡家島町大字宮字男鹿島に所在する。男鹿島は、姫路港の西南海上約15km、家島本島の東南約1.5km、井島I型ナイフ形石器を出土したことで著名な太島の西南約1.9kmに位置し、周囲約9.7kmである。花崗岩質の山塊が、その面積の大半を占める。男鹿島には、踏査によって他に約15の遺跡が知られている。同島の西寄りに最高点があり、遺跡はそこに存在する。標高は約220.4mを測る。また、GPS衛星利用の地球測位システムによる遺跡ほぼ中央部で、WGSは北緯34度39分53秒、東経134度34分09秒、JAGSでは、北緯34度39分40秒、東経134度34分17秒である。遺跡の北、東、南は小高い丘状の地形を呈する。丘状の高まりが北西方向にその緩斜面を伸張しているために、西側は谷部となっている。この谷部に、採石に起因する断崖絶壁が迫っている。

遺跡は、1959年の第一次家島群島総合学術調査の一環として、同年7月、南北約240m、東西約150mの範囲内で27箇所を試掘調査がなされた¹⁾。調査の結果、弥生時代第五様式の壺棺、第四～第五様式の土器片、石器類などが発見された。同学術調査でのナイフ形石器の発見は、男鹿島の南海岸、田ノ浜東部に位置する舌状台地基部の標高約60mを測る地点（田ノ浜第1地点）である。なお、他に同島西部のヒシノ鼻付近の台地にも「トラピーズ状の小石器」が検出されている²⁾。筆者らの1989年以降現在までの調査の方法は、遺跡の南北方向に南から数字列、東西方向に西からアルファベット列のグリッドを組み、それぞれ4m間隔とした。約6000m²が調査されている。当調査によれば、時期的には弥生時代中期後半～後期を主体とすることが明確となった。当該時期の遺物、遺構では、土器片、打

製石庖丁、楔形石器、石錘、凹み石、叩石、石鏃、各種石斧類などが多数出土し、竪穴住居跡約13棟、土坑約36基以上の存在が確認された。これら以外に旧石器、須恵器、輸入陶磁器、中世に構築された石組み井戸や谷部を弧状に取り巻く石列が検出された。

現在調査が進行中であり、遺跡各地区相互の層序の対比に関しても検討中である。したがって、後記する層序は概略的、かつ相当に流動的なものとなっており、将来訂正される可能性が十分にあることを明記しておく。詳細で正式な記載は、本報告に委ねたい。谷部に近い緩斜面の地区では、上から、第Ⅰ層：表土、第Ⅱ層：黄褐色粘質土層、第Ⅲ層：暗褐色砂質土層、第Ⅳ層：淡褐色砂質土層、Ⅴ層：地山となる。第Ⅲ層は、弥生時代中期～後期の遺物の包含層である。場所によっては、第Ⅳ層が無いところがあり、小高い丘の部分では、第Ⅲ層が欠落している。地山は花崗岩、ないしはそれが風化したものである。石列によって取り巻かれた谷部内側の地区の層序は、表土を除くそれ以下の層のシルト化が進行し、旧石器に関係する層だけを掲げると以下の如くとなる。第Ⅳ層：灰白色砂質土層、第Ⅴ層：明灰色砂質土層、第Ⅳ層：明灰色粗砂層となる。第Ⅴ層と第Ⅳ層は、褐鉄鉱によるオレンジ色の色調を部分的に呈する。グリッドによっては、第Ⅴ層直上に明褐色粘質土層がブロック状に入ってくることもある。ここで扱うナイフ形石器は、谷部の第Ⅳ～Ⅴ層、弥生土坑埋土などから出土し、グリッド毎に一括して取り上げられた資料である。なお、出土旧石器の一部は、すでに報告されている³⁾。

ナイフ形石器 (図1, 2)

現時点では、切出形も含めると約20点弱のナイフ形石器が調査時に検出されており、約4点の資料が表面採集されている。今後も資料の増加が予想される。石材の大半は、サヌカイトが用いられている。ここで扱う資料の石材もすべてサヌカイトである。法量は、縦×横×厚さ、重量の順で示す。使用痕は、肉眼観察による。

1は、横長剥片を素材とし、上、下両方が破損した資料である。背面左側縁を刃部とする。同面右の腹面側からの調整による剥離痕は大きく、素材剥片の打面に対しておこなわれている。背面中央部から右側の調整剥離に先行する小剥離面の加撃は右方向のものが全てとなっている。背面左の大きな剥離面は、右方向からの加撃による。したがって、現存状態に限定すれば、素材剥片は、石核の一縁辺から打点を移動しながら連続的にほぼ同一方向への加撃によって剥取されたと解釈可能かも知れない。上下両端部の破損は、上部は腹面方向から、下部は背面方向からの加圧による。使用痕は、腹面上部近くから下部にかけて続き、側縁を挟り込むものが下部付近で観察される。3.47×2.04×0.85cm, 6.28g。谷部弥生土坑埋土出土。石材の風化は進行していない。

2は、横長剥片を素材とし、背面左側縁に刃部が位置する部厚な資料で、横断面が三角形に近い。背面右側縁全体、つまり素材剥片の打面部分に、腹面側からかなり大きな調整が続いている。基部の作出方法は独特であり、背面右側縁方向からの加撃による剥離面に

対し、腹面側からほぼ一回のフルーティング状剥離によって形成される。したがって、基部正面観は、キールド＝スクレイパーを想起させる。基部のこの調整剥離は、隣接する側縁部調整剥離の一部よりも後発する。刃部は非常に部厚である。なお、刃部を形成する背面左の剥離面はポジティブな面であり、バルブが観察される。腹面の右には、剥片の末端部付近に通常生じるアンデューレーションが見られる。よって、素材剥片は、剥片石核の背面側から腹面への剥離作業で、最初の頃に得られた目的剥片と考えられよう。4.17×1.05×0.99cm, 3.53g。谷部第Ⅴ層出土。石材の風化は、進行していない。

3は、横長剥片を素材とする。末端部近くを破損している。腹面側からの加撃による調整が、背面右側縁全体におよぶ。先端部付近では左側縁にもそれらが観察される。右側縁の個々の調整剥離面は概して大きい。背面中央部右の前段階の二つの剥離面は、右側縁方向からである。同面左の二つの剥離面は、左方向からとなり、右側縁方向からの剥離が、左方向からのそれらに後行する。さらに、腹面は、二つの剥離面で構成され、その加撃方向は左ないしは、左上方向からとなっている。したがって、素材剥離は、石核の一縁辺から同一方向に数回の剥離によって目的剥片を生産した後、打面転移をおこない同様な作業を繰り返す方法が採用されたと想定できよう。刃部の上半部に一ヶ所、「三日月」を呈する使用痕が観察され、その側縁にさらに微細な使用痕が付着している。谷部弥生土坑出土。4.84×1.47×0.71cm, 5.15g。石材の風化が進行している。

4は、横長剥片を素材とし、背面右側縁に刃部が位置する部厚な資料で、横断面が三角形に近く、調整方法においても、2のナイフ形石器と酷似する。刃部は、背面右側縁に設定している。同面左側縁全体、つまり素材剥片の打面部分に、腹面側から大きな調整痕が続き、下半部のそれはステップ＝フラクチュアを引き起こしている。側縁調整の施された背面左側縁は、直線的にはならず弧状となる。また、先端部付近では、稜線上から左側縁に向かって細かな調整剥離がおこなわれている。背面の先端部は、腹面側から右側縁への約三回の加撃による調整が入るが、尖っていない。基部の作出方法は2の資料と同じ方法が採用されており、本資料の場合、腹面方向から数回のフルーティング状の剥離によってなされ、最終的にこの剥離は、背面右側縁末端部に対しても見られ、ここでは「斜め整形」の観を呈する。基部に近い部分の側縁部調整剥離の方がこれに先行する。刃部は部厚であり、使用痕は少ない。刃部を形成する背面左の剥離面はネガ、ポジティブいずれとも判別し難い。4.49×1.19×0.91cm, 4.58g。谷部明褐色粘質土層出土。石材の風化は、進行していない。

5は、横長剥片を素材とし、背面右側縁を刃部とする小型の資料である。左側縁に調整がみられる。調整は素材剥片の打面部に対して、腹面側からの加撃による。バルブは完全には除去されず、基部調整もおこなわれていない。背面左側縁における調整は、先端部から側縁半分くらいまでは入念になされ、そこから下半部にかけては粗くなり、基部にまでは至っていない。背面中央稜線付近の二つの大きな剥離面は、この器体自体の大きさから

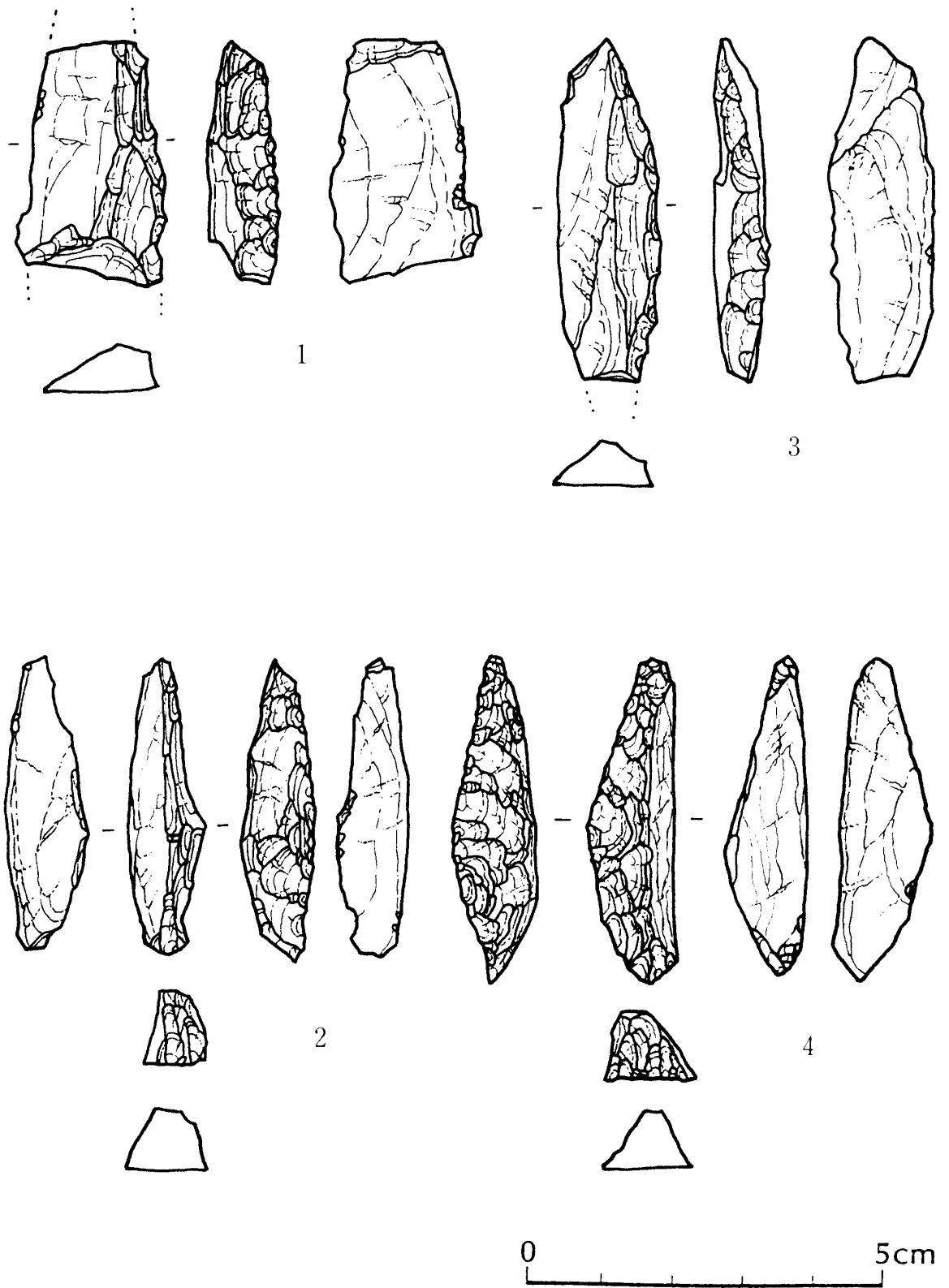


図1 大山神社遺跡出土ナイフ形石器

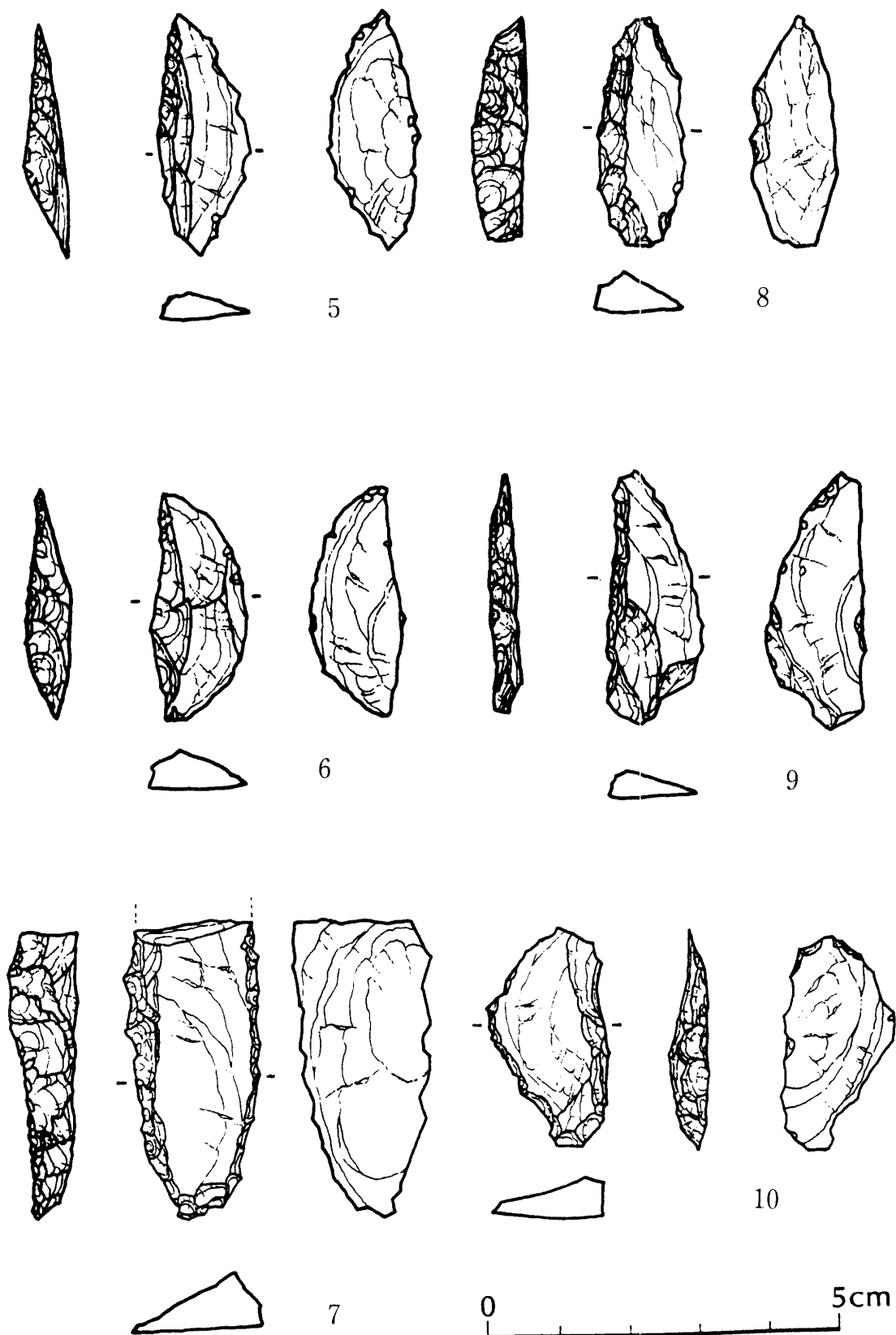


図2 大山神社遺跡出土ナイフ形石器

判断すると、打面調整剥離によるものではなく、目的剥片剥離によるものと推察される。背面中央左の一枚の剥離面の加撃方向は左である。したがって本資料だけから考えられる素材剥片の生産方法は、石核の一縁縁において打点を移動しながら同一方向への連続的な加撃による方法が想定できよう。刃部は外湾し、上半部と基部近くに刃こぼれ状の大きな使用痕が存在する。特に、上部のものはその部分にさらに微細な使用痕が認められ、ノッチの観を呈する。しかし対応する腹面側にはそれらが観察されない。3.52×1.32×0.53cm, 1.84g。谷部第Ⅳ層出土。石材の風化は進行していない。

6は、横長剥片を素材とし、刃部が背面右側縁に位置し大きく外湾する。調整は、腹面側から素材剥片の打面部に対する加撃によっておこなわれ、背面左側縁全体におよぶ。素材剥片のバルブ位置は、腹面右側縁下部となる。背面左側縁先端部と、中央部は細かな調整がなされているが、それ以外、とくに同側縁下半部では概して粗くなり、中央部の調整はステップ=フラクチュアの連続に終わっている。基部調整は観察されない。背面刃部中央の剥離面の加撃方向は右方向から、他の諸剥離面のそれは左方向からである。素材剥片の生産方法は、この資料のみから判断すると、石核を180度打面転位した後、打点を移動させながら、数枚の剥片を連続的に剥離する方法と考えられる。求心的な剥離方法も推察できよう。使用痕が刃部にみられ、なかには刃こぼれ状の類も存在する。3.29×1.39×0.51cm, 2.09g。谷部弥生土坑出土。石材の風化は、進行していない。

7は、横長剥片を素材とし、上部が破損している大型の資料である。調整は腹面側からの加撃だけでおこなわれ、素材剥片の打面に該当する背面左側縁、基部さらに右側縁におよぶ。左側縁部の調整痕は、右のそれに比較して大きく急角度であり、鋸歯縁状を呈している。破損は、腹面方向からの加圧に起因する。4.22×1.93×0.89cm, 7.67g。谷部第Ⅴ層出土。石材の風化は進行していない。

8は、横長剥片を素材とし、刃部が背面右側縁に位置し、二側縁調整の資料である。調整は、腹面側からの加撃によっておこなわれ、背面左側縁全体と基部、さらに右側縁下部に施されている。素材剥片のバルブは、完全に除去されている。基部と右側縁の調整はやや粗く、とくに右側縁下部のそれは断続的となる。背面中央より右の剥離面は、左下部方向からの加撃による面であり、それ以外の古い面は全て左からの加撃であり、腹面は右方向からとなる。したがって、この資料だけから判断すると、石核の打面をほぼ90度近く転位した後、同一縁辺上で打点を移動させながら、数枚の剥片を連続的に剥離する方法と考えよう。使用痕は刃部先端付近と中央部に顕著であり、後者の位置のものは、刃こぼれ状を呈し、かつ腹面側にもそれと対応するところに「三日月」状の類のものが存在する。3.26×1.23×0.55cm, 2.20g。谷部第Ⅳ層出土。石材の風化は、かなり進行している。

9は、横長剥片を素材とし、刃部が背面右側縁に位置し、一側縁調整の資料である。素材剥片の末端部はステップ=フラクチュアに終わっているが、そのまま利用している。刃部は、器体下半部で外湾する。基部調整は見られない。調整は、素材剥片の打面に対して

腹面側からの加撃によっておこなわれ、ほぼ側縁全体になされている。調整の剥離痕は繊細である。背面の調整剥離以外の剥離面の加撃方向では、下端のそれが左下方向からであり、他は左からである。よって、この資料も90度に近い打面転位を伴う素材剥片生産方法を窺わせる。使用痕は、腹面の先端部付近と下半部に、背面上部に観察される。3.60×1.39×0.46cm, 2.10g。谷部第Ⅳ層出土。石材の風化は進行していない。

10は、横長剥片を素材とする切出形ナイフ形石器である。刃部は背面上部斜めに位置する。調整は、腹面側からの加撃によっておこなわれ、背面左右側縁ほぼ全体と基部に施されている。右側縁の調整痕は、左のそれに比較して大きく急角度である。基部の調整は、二～三回の剥離によってなされる。背面左の大きな剥離面はネガティブな面であり、その加撃方向は素材剥片の剥離方向に近い。したがって、現資料のみからの素材生産方法は、石核の一縁辺に沿ってほぼ同一方向への連続した剥離による方法が採用されていると言えよう。使用痕は背面の刃部左寄りでは背面側に、刃部右寄りでは腹面側に顕著であり、同じ位置で、背面と腹面の両方に付着する使用痕は観察されない。3.12×1.70×0.58cm, 2.40g。谷部第Ⅴ層出土。石材の風化は進行していない。

ま と め

旧石器の多くは、谷部で出土している。この地区では弥生時代の土坑群がかなりの密度で存在する。第7次調査以降は、谷部の旧石器の出土状態に関して、レベル、位置、層位などの詳細な記録と検討がおこなわれつつある。ここでは各ナイフ形石器の製作過程、形態などの観点から接近を試みたい。

ナイフ形石器は、大きくAからCまでの3つのグループに区分出来そうである。A群は、図2の5, 6, 9が該当する。貝殻状の横長剥片を素材とし、縦の長さが4.00cm, 横が1.50cm未滿の小型の資料であり、いずれも腹面側から一側縁、とくに素材剥片の打面に対して調整がなされる資料である。基部調整は見あたらない。背面の調整に対して刃部が大きく外湾するのも特徴の一つとなろう。資料に残された剥離面だけからの検討に限定すると、素材剥片生産方法は、打面転位を伴い、一縁辺で打点位置を移動させながら、数枚の剥片を連続的に剥離する方法が採用されている。この場合、求心的な剥離方法も想定できよう。図2の8も含めて良いのかも知れない。

B群は、図1の1, 図2の7が該当する。二点ともに破損資料ではあるが、横長剥片を素材とする。大型で素材剥片の打面に対する調整は、腹面側からの大きな剥離によってなされ、鋸歯縁状を呈する場合もある。基部調整がみられ、二側縁調整も存在する。素材剥片の生産は、石核の一縁辺から打点を移動させながら同一方向への剥離によってなされているとも推定される。目的剥片剥離のための石核は、剥片素材の可能性もあろう。

C群は、図1の2と4が相当する。横長剥片を素材とし、横断面が三角形ないしは台形を呈する。調整は、二側縁におよぶ場合もある。側縁の調整はおもに腹面側からの加撃に

よるが、対向剥離も存在する。基部の調整方法に特徴があり、それは腹面側からフルーティング状の連続した剥離によってなされる。刃部も部厚である。素材剥片の生産は、石核の一縁辺において打点を移動させ、ほぼ同一方向へ向かう連続的な剥離によってなされる。石核は剥片を素材とするものがある。図1の3は、おそらくA群とB群との間の位置、ないしはB群に近いところに入ってこよう。

層位的には、A群に所属する小型ナイフ形石器のグループが、B、C群よりも上層からの出土を見ている。なお、石材のサヌカイトは、色調などから数種類に分類することが可能である。最近、大阪平野、中国山地にて新知見が増加している。A群は打面転位をおこない、一側縁において数枚の剥片を剥取しているが、そこでは、規格性に乏しい素材剥片が生産され、打面と末端部が接近したいわゆる「寸ずまり」の貝殻状にちかい剥片や、ステップ=フラクチュアに終わっている剥片さえも使用されている。このような生産方法は、八尾南遺跡第2地点^{4),5)}、あるいは、牧野遺跡第5地点^{6),7),8)}の剥片生産技術に近いのではなからうか。B群は、大型で横長の剥片を素材としている。数的に小数、かつ破損資料のため他の遺跡との比較は困難であるが、形態、調整の剥離痕の状況などから強いて対比させれば、八尾南第3地点^{9),10),11)}、笹畝遺跡第1地点¹²⁾あたりのステージに位置させることが可能かも知れない。いずれにせよ、今後の資料的な増加および層位的な石器群のまとめりと母岩別接合資料の出土が望まれる。

引用文献

- 1) 鎌木義昌 1962 無土器文化 家島群島総合学術調査報告書 pp. 69-78 神戸新聞社
- 2) 1)と同じ
- 3) 小林博昭 他 1992 大山神社遺跡 兵庫県史 考古資料編 pp. 292-294 兵庫県
- 4) 駒沢 敦 1987 大阪府八尾市・八尾南遺跡出土の石器 最近の大阪平野出土の旧石器 pp. 21-23 第11回近畿旧石器文化交流会
- 5) 長屋幸二、三原慎吾 1988 八尾南遺跡基調報告 シンポジウム ナイフ形石器終末期 石器群を中心とした諸問題 pp. 38-42 第12回近畿旧石器文化交流会
- 6) 小林博昭 他 1984 岡山県牧野遺跡第5地点 日本考古学年報 37 pp. 332-336 日本考古学協会
- 7) 小林博昭 他 1987 岡山県北部の火山灰と石器群 日本考古学協会1987年度大会 研究発表要旨 pp. 19-25 日本考古学協会
- 8) 小林博昭 1988 岡山県中国山地ソフトローム期における剥片生産技術の一側面 鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学 pp. 31-69 鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会
- 9) 福田英人 1987 八尾市・八尾南遺跡87-1調査区 最近の大阪平野出土の旧石器 pp. 11-14 第11回近畿旧石器文化交流会
- 10) 福田英人、吉原早智子 1988 八尾市・八尾南遺跡87-1調査区 シンポジウム ナイフ形石器終末期 石器群を中心とした諸問題 pp. 34-37 第12回近畿旧石器文化交流会
- 11) 福田英人他 1989 八尾南遺跡-旧石器出土第3地点- 大阪府文化財調査報告書 第36号 大阪府教育委員会
- 12) 8)と同じ

Palaeolithic blunted backed knives excavated
from Oyamajinja site,
Ieshima-cho, Hyogo Prefecture

Hiroaki KOBAYASHI

Faculty of Liberal Arts and Science

Okayama University of Science

Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan

(Received September 30, 1992)

The excavation has been held at Oyamajinja site since 1989. During the excavation, Palaeolithic artifacts were dug up. They are consisted of flakes, chips, cores, utilized flakes, blunted backed knives, and so on. Most of them are made from sanukite. Analyses were applied to these knives from the standpoint of the lithic technology. All of them are made on flakes. They were divided into three groups based on the typology and the technology which was employed detaching original flakes retouched as knives from cores. Three groups may show some stages of the Upper Palaeolithic industries in Setouchi area.